

書評

高倉浩樹 著

『極北の牧畜民サハ——進化とミクロ 適応をめぐるシベリア民族誌』

(昭和堂、二〇一二年)

池谷和信 (国立民族学博物館教授)

はじめに

これまで、ソ連社会主義の崩壊する一九九〇年代初頭以降、ロシア国内に暮らすネネツ、エヴェン、チュクチ、コリヤーク、ナーンイ、ニプフ、ウイルタなどのマイノリティーの社会経済変化に関する研究が国の内外で蓄積されてきたことはよく知られている。その結果、同じ民族内においても崩壊後に生まれた農業経営体の種類や、家畜の個人所有のあり方などの社会主義時代の経験の違いに応じて社会経済変化の内容は大きく異なっていることは明らかにされてきた (Yoshida 2001: 池谷二〇〇七ほか多数)。本書では、これらの問題枠組みのなかであまり注目されてこなかったサハ人を対象にしたものである。彼らは、マイノリ

ティーのなかでは人口が多く(サハ共和国の面積は三一〇万平方キロで人口は約九五万人、このうちサハ人は約四五万人、四四頁・本書の頁数を示す)、一九九〇年以降における社会主義崩壊後においてどのように市場経済化などに対応してきたかが本書の課題である。

しかし、本書は、この課題の追求のみにとどまらない。

副題にみられるように、進化と適応の概念を用いて、サハ人の生業活動を中心とする民族誌的な資料を人類文化史のなかに位置づけることを構想する。これまで、「極北の民」といえば、北米の狩猟採集民イヌイット(エスキモー)やシベリアのネネツや北欧のサミのようなトナカイ牧畜民が、よく知られてきた。しかし、本書では、もうひとつの極北環境への適応形態として牛馬飼育という生業活動に注目している点が、本書の最大の特徴になっている。

本書の内容

本書は、全体が一〇章から構成され、巻末には英語とロシア語による目次と要約が付記されていて本書の要点を知るには便利である。まず第一章では、本書の目的、方法、分析に使う基本概念が整理される。ここでは、牛馬飼育民サハ人の民族誌を「極北牧畜」や「極北適応」のなかの一つとして位置づけ、生業複合、生業体系をとおしてみた適

応に焦点を当てるとする（三頁）。同時に、マクロ適応とミクロ適応という二つの基本概念を紹介して、本書はきわめて短い時間（ポスト社会主義時代）にみられるミクロ適応を問題にすると言及する（一五頁）。

第二章では、対象地域のレナ川中流域における自然生態と民族文化史の概観が紹介される。サハ人が暮らすヤクーチアは、夏は高温で冬は極度の低温になる北極圏・亜寒帯地域に位置する。また、この地域は、レナ川流域の河岸段丘を除けばカラマツを中心とする落葉樹林におおわれており、部分的にはアラスと呼ばれる円形の草原が多数点にしている。土壌は、永久凍土である。さらに、古くはサハ人がバイカル湖周辺で五畜による牧畜と農耕からなる生業に従事していたという（三四頁）。その後、帝政ロシアの時代、社会主義時代そして現在というように対象地域の歴史の概略が示される。そして第三章は、近代化以前におけるサハの伝統的な生活風景、社会主義時代の農業集団化、ポスト社会主義の変遷をふまえてサハ人の父親像の変化に言及する。

第四章から第八章までは、農村に暮らす現代のサハ人の生業複合のなかで個々の生業活動を取りあげて、それぞれをより具体的に記述する。第四章では、凍結水面下での秋の漁業の実際や生業暦のなかでの漁業の位置づけ、そして冬季に困難である飲料水採集活動の実際が紹介される。両

者とも、極北への生業適応の特徴をよく示している。

第五章は、ポスト社会主義時代の新しい農業政策を概観したあとに、これまでとは異なりタバガ村（人口一八八人）に焦点を当てて、そこでの生業活動の複合状態を報告する。ここでは、ソビエト時代に八つの国营農場があったが、現在、集団経営型とファミリー経営型（農民経営体）の二つに分裂したという（二〇一頁）。それぞれ、二二の企業体に一七〇〇人、三八八に二四〇〇人が働いているという。住民は、ほとんどこれらで働いているが、敷地内の畑や家畜小屋の牛飼育などの個人副業経営にも従事している。本章では、「副業」（筆者による括弧）のなかで冬季の舍飼いの牛の餌としておこなう草刈り、漁撈、ベリー採集、狩猟などの概観が述べられる。

そして、第六章から第八章にいたる部分が、約一〇〇頁以上割かれていて、本書のなかで最も実証的なデータで裏付けられた中心部を占める。第六章では、対象地の自然資源利用のなかで中心を占めるアラスでの草利用が述べられる。ここでは、草刈りの歴史の変遷を概観したあとに、地名を中心とした空間認識や土地利用の観点から秋の採草地の利用の詳細が紹介される。第七章と第八章は、サハ人にとってもっとも伝統的な生業である馬飼育活動に焦点を当てて、前者ではその管理技術や生殖管理について、後者では農村内にとどまらず都市住民にも広がる馬飼育をめぐ

る委託慣行について詳述される。そして、第九章では、牛馬飼育を中心にすえたサハ農民による牧畜生産からみた市場経済適応の全体がまとめられる。

以上のような、本書の各章は、筆者による既存の論文を主に組み合わせてつくること、サハ共和国内のサハ人を対象にして、家畜飼育を中心とした現在の生計活動の実際に焦点を当てたものである。以下、評者は、三つの点から本書の内容に対してコメントをする。

本書へのコメント

第一は、本書の内容の構成に関する点である。英文の要約にあるように、「本書はサハ人に関する日本人による最初のモノグラフ」であり、冒頭で述べたようにこれまでのマイノリティーの研究のなかでサハ人が含まれていなかった点はよく理解できる。これは、本書の最大の売りといつてよいであろう。しかし、本書の特徴や独創的な点を読者がどこまで理解できたであろうか。それは、サハ人を対象にした内外の研究史が書かれていないことが原因であろう。評者の私見によると、文献資料を中心とした斉藤の一連の研究（斉藤一九九五）、サハ人の儀礼の復興をテーマにした山田の研究（山田一九九八）などの先行研究はよく知られている。本書でも頻繁に引用されているクレイトの

サハ人の村での雌牛生産と乳や肉をめぐる分配システムの研究（Grate 2006）なども序論の研究史にまとめるべきであったのではないだろうか。これらによって、馬飼育と牛の餌となる採草地利用を中心とした本書の特徴や独創的な点を読者により誤解なく伝えることができたであろう。

その上、各章の調査地がサハ共和国のなかであちこちにみられるので（二五頁の地図参照）、生業複合の実際やポスト社会主義時代の適応に関する議論が荒いという印象をぬぐえない。筆者が最も詳しい村であるタバガ村の事例（例・第五章）を中心に据えて論を組み立てた方がよかったのではないだろうか。そして、はたしてタバカ村の生業複合の実際を考える際に、村のなかでの世帯別の違いはないだろうか、漁撈ではカムガッタ村やニュング村の事例（第四章）を、馬飼育ではサクリール村（第七章、一五〇頁）の事例をどのくらい参照してよいものか、本書内での撮影地の異なる各地の写真をみても感じるところである。この点が、本書のなかでサハ人の歴史概観やロシアの農業政策史が重複して記述されることにもつながっているであろう。

第二は、本書のタイトルにある「牧畜民サハ」と、本書の中心的な対象である「サハ人の村」の実像との大きな違いである。読者が、どこまでその違いと共通性を理解できたのか疑問である。本書でも引用されている東アフリカ

(ケニア)に加えてシベリア(チュクチ)の地域を訪問した評者の私見によれば、東アフリカの牧畜民とサハの人々ではあまりにも実像が異なっている。社会主義的近代化を経たサハの農村は、東アフリカ(例、マサイ)の村よりも北海道や本州の酪農村などの景観や社会経済生活に近いのではないだろうか。ただし、上述したサハ人の村の集団経営型の方は日本ではなじみがなく理解が難しいであろう。

本書では、サハ人の村のなかで馬飼育に関する牧畜文化の詳細を知ることができ、しかも子馬肉の商品化の時期が新しいなどの歴史的分析はとても興味深い内容を示している(二五七頁)。しかし、本来ならば、サハ人の家畜飼育以外の農村の社会経済生活を十分に紹介して、馬飼育の位置づけをより明確にすることが重要であろう。馬牧夫の仕事、馬群の管理技術、委託関係などの貴重な資料の提示は十分に評価できるが、これら資料の地域社会のなかでの位置づけをより詳細に行う作業が必要ではないだろうか。

本書から、個々人が中心となる仕事に従事して、「副業」として狩猟、採集、漁撈、牛飼育、(農耕)を組み合わせていることは理解できる。これらは、評者が研究してきた現代日本の山村の生業複合のありようと類似しており、十分に産業化した国の村落生活の特徴をよく示している。この点から、定住化や集団化などの近代化の枠組をすえて南と極北の牧畜民の変容の比較研究を提案する筆者の

提示(一九頁)に、評者は同意するものである。しかも、国家の影響を長年にわたっていたサハ牧畜民という捉え方は、まさに本研究の意図としてはよく理解できる。ただ、そのためには、サハ牧畜民の歴史の変遷を正面に据えた広義の歴史学的研究をしなくてはならないであろう。なお、この点は、南アフリカ共和国のなかで、近代化の歴史の長い牛牧畜民コイコイに対しては、人類学的な研究よりも歴史学者エルフィクの研究などがより大きな成果を出していることなども参考になるかもしれない(Elphick 1977)。

評者は、本書のなかで「馬の民」であったサハ人が帝政期に牛中心の牧畜に変化した点、一八世紀に農業も行いうになった点、本書ではふれていないがその後の農業の変遷(小麦、大麦、オート麦の栽培など)が、生業の変化を考えるうえで見逃せないとみている。なかでも、(Ⅰ)牛馬牧畜型、(Ⅱ)トナカイ・牛馬牧畜型、(Ⅲ)牛飼育・農業型にサハ人の三つの家畜飼育形態の地域差が論じられることもあり(斉藤一九九五・一四三)、最後のタイプが気になる所である。

本書では、サハ人を馬の民(四一頁)、狩猟牧畜民(一二頁、二二三頁、二五一頁)、牧畜民、牛馬飼育民(二頁)、少数民族(一九頁)などと呼んでいるが、これらの違いの背景には生業や地域政治の変化が関与しているのではないかと推察する。これらの用語は、もう少し整理が必

要であろう。

第三は、本書の進化とミクロ適応に関する理論的な枠組みについてである。本書は、社会人類学に生態人類学で用される二つの概念を導入して新たな人類文化の研究を意図する点では理解できるが、社会変容という従来の用語をミクロ適応に置き換えることには、長所・短所があるのではないだろうか。まず、長所は比較研究の枠組みを提示して他の地域の研究も関与できるよさである。これまで、ポスト社会主義研究は、ポスト社会主義国を研究していないと参加が難しいという閉鎖的な側面があったが、本書の適応と進化の概念は、さまざまな地域の研究者の衆知を集めるにはよい枠組みである。たとえば、寒冷地の適応というテーマは極北だけのものではない。ヒマラヤやアンデスなどの高地への牧畜適応が比較の素材にもなるであろう。なかでも、ヒマラヤでは冬季の家畜飼育に採草地の利用が不可欠である。その一方で短所は、生態人類学でも批判されているように、適応の概念は予定調和を前提とした用語にもなりかねないことである。多くの研究は、何の基準もないうままに地域住民は環境に適応しているということになる。また同時に、本書の惜しい点は、適応に焦点をおくあまり、冒頭で述べたポスト社会主義時代のマイノリティー研究にサハ人の牛馬飼育適応の事例が、どういう新たな貢献をしたのか、あるいはしていないのか、本書で詰めて

議論されていないことであろう。

まとめ

本書は、現地調査を中心に据えて牛馬飼育（副業）にかかわる生業活動を中心とする現在のサハ農村の姿を伝えるものであり、ポスト社会主義諸国のなかでの家畜飼育のあり方を紹介する豊かな資料が満載している。この意味で地域研究として、今後さらなる研究の展開が期待できるであろう。同時に、評者は、今後、筆者が本書で論じたミクロ適応のみならずマクロ適応の把握を積み重ねることによって、人類文化史のなかでの「極北の牧畜民サハ」の特徴を見出すことができるのではないかとみている。以上の二つの方向へ、筆者の研究のさらなる展開を期待したい。

●参考文献

- 池谷和信（二〇〇七）「チュコトカ自治管区におけるトナカイ
牧畜の変化の多様性——危機に対するチュクチの対応」。
煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学——強国に生きる民族性
と帰属性』京都大学学術出版会、一四九—一六二頁。
斉藤辰二（一九九五）「サハ（ヤクーチャ）の草原と牛馬飼育」
『スラヴ研究』第四二巻、一三五—一四七頁。
山田孝子（一九九八）「サハ・ヤクートにおけるシャマニズム
の復興と自然の意味」『エコソフィア』第一号、一二九—一

四七頁。

- Crate S. (2006) *Cows, Kin, and Globalization: An Ethnography of Sustainability*. Alta Mira Press.
- Elphick R. (1977) *Kyval and Castle: Khoikhoi and the Founding of White South Africa*. Yale University Press.
- Yoshida, A. (2001) Some Characteristics of the Tundra Nenets Reindeer Herders of Western Siberia and their Social Adaptation. *Semri Ethnological Studies* 59: 67-80.

●著者紹介●

- ①氏名……池谷和信(いけや・かずのぶ)。
- ②所属・職名……国立民族学博物館民族社会研究部人類環境部門・教授、総合研究大学院大学文化科学研究科・教授。
- ③生年・出身地……一九五八年、静岡県。
- ④専門分野・地域……環境人類学・人文地理学、アフリカ地域を中心とした地球学。
- ⑤学歴……東北大学大学院理学研究科。
- ⑥職歴……北海道大学文学部北方文化研究施設文化人類学部門助手(五年間)を経て、国立民族学博物館助手・助教授・教授に至る。
- ⑦現地滞在経験……ボツワナ(三年以上)、ケニアや南アフリカ(それぞれ一年以上)、その他一〜三ヶ月の短期滞在在地は、アフリカ以外にも多数。
- ⑧研究方法……自然に強く依存している社会での長期参与観察、および古文書館での資料収集を行い、地域の生態、社会、歴史を総合的に把握する方法を模索。
- ⑨所属学会……アメリカ人類学会、日本地理学会、日本アフリカ学会、生き物文化誌学会、人と動物との関係学会、日本養豚学会ほか多数。
- ⑩研究上の画期……一九八七年のボツワナでの初めての長期滞在の経験。サンの人々とカラハリ砂漠を歩きまわり、木に登って一夜を過ごした。ライオンが近くまでやってきたが助かったことで、自然と人とのかわりの研究は命がけであると痛感する。
- ⑪推薦図書……川喜田二郎『野外科学の方法』(中公新書、一九七三年)。古い本ではあるが、現在の科学の中で危機に瀕すると思われるフィールドワークの方法を再考するヒントが含まれている。